

# まちの史跡めぐり……(101)

町文化財専門委員 石瀧 豊美

江戸時代へようこそ(12)

= 村の一年(続き) =

## 【六月】

菜種の産出量についての報告が求められています。

昨年、大坂表に菜種を送って販売したものがいまいかどか。それから、今年の菜種の出来高はどれだけか。その石高を二十九日までに報告しなければなりません。須恵町域での江戸時代の菜種の産出量はわかりませんが、明治の初め頃には次のようでした。菜種の量を石高で、その売り上げを円で表現しています。当時の一円は江戸時代の一両に当たります。

佐谷村	六八石 四二五円
上須恵村	一一石 六〇円
須恵村	二〇石 一一五円
新原村	三三石二斗 一四円
植木村	四〇石 二〇二円五
本合村	六錢 一四石 六一円七〇
旅石村	三三石 二〇〇円
七か村合計	一八九石二斗 一〇八八円三六錢

菜種からは種油が作られますが、その業者は須恵、新原、本合、旅石にいました。その産出量は次の通りです。

須恵村	二〇斤 六〇〇円
新原村	五石 一三三円二錢

## 【七月】

十二月以後の止宿証拠を二十日までに取りそろえ、大庄屋に差し出すように、と定められています。止宿は宿に泊まることですが、この場合、村であって宿場ではないので、本来の宿を指しているわけではありません。村人が旅人、しかも長期に泊めることにはないにしても、親戚を止めたり、日が落ちて途方にくれた旅人を人助けのつもりで泊めるといったことはあったでしょう。

その場合、旅人の身元を確認するために、止宿証拠(宿帳のようなもの)を書き留めておく必要があったのです。名前と住所と、通行手形を持っているかどうか。持っているなければ、不審者として役人に届け出ねばならないでしょうから、泊めた人物が通行手形を持っていることは前提です。その内容を写し取ったものが、止宿証拠といふことになりました。

庄屋にはその都度報告が来ているわけですが、大庄屋を通じて藩に報告されるのが年に二回だったということになります。

須恵村、上須恵村は農村である

## 【八月】

にも関わらず、特別に旅人の長期滞在が許されていました。言うまでもなく、有名な眼科医を中心とした治療場が形成されていたからです。目の治療を求める人たちは九州を中心に全国各地から訪れ、しかも長期の滞在を余儀なくされていたと思います。このことは別にふれていきたいと思います。

七月は冬季懐婦臨月帳を五日までに養育方へ差し出すこととされています。

もうひとつは、地頭納めのこと。七月はお盆の行事に必要なものを村から地頭(知行地)を持っている侍)に差し出します。

以上は、すでに触れたことの繰り返しです。

直津出庄屋請合分

津出しとは年貢を納めることを言います。直津出しですから、村が直接、侍のところへ持参するという意味でしょう。

この項目をもう少し詳しく見ると、「御給知」、「定為替御足」、「御自分納」についての規定で、共に直津出しを庄屋が請け合った分について、書上帳を当月限り、提出するよう決められています。

武士の給与形態には「知行」と「扶持方」とがあることは、第九回です。すでに触れています。知行は「石」と表現し、村に領地を持っています。時代による変化は

## 【九月】

ありますが、基本的には領地から年貢を届けさせることになりました。扶持方は「石」人扶持」と表現し、藩の蔵から米を支給されるのです。

知方の中でも家老クラスの武士になると、村をまるごと領地にしていて、しかもそれが何か村にもまたがっています。このような身分の高い武士は家来を多く抱えていて、年貢は自分の家来を使って収納させることになりました。これが「自分納め」です。

御給知は村に領地を持つ武士のことで、家老クラスほど身分が高くないので、年貢収納の事務を行うスタッフを抱えていないのです。このため、庄屋が代行しています。定為替御足は少し説明がいりませんが、「御足」は給与の計算方法が変わったために、実収に不足額が生じた時に、その不足分を補うことを言います。「定為替」は為替ですから、年貢を現物で移動させるに、為替(証券)として納めるのです。侍の方ではその為替を藩の蔵や商人のところに持ち込めば現物の米と交換されることになりましたが、現実には換金されていたことと思われれます。

いずれにしても、年貢徴収方法は村によって違いがあったために、秋の刈り取りの前に見直しを立てておく必要があったのです。

# 久我記念美術館

9月企画展 6日(火)~25日(日)  
(月曜休館・祝日の場合は翌日休館・入館無料)

## 世利好薇・奥村完奈 二人展

9月の久我記念美術館は、6日から25日まで「世利好薇・奥村完奈 二人展」を開きます。

作品は、油絵や彫刻、版画など大小30点。「人が生きる」ということをテーマに、静かな人物画を描く世利さん。最近山登りを始め、山で感じた絵が多くなったという「音的半抽象画」を描く奥村さん。生命(いのち)と半抽象の世界、個性豊かな展覧会になりそうです。

また、9月10日(土)午後2時から、館前の広場でオープニングパーティ兼、屋外展示を予定しています。内容は見てからの楽しみです。みなさん気軽にお越しください。お二人からメッセージが寄せられておりますので紹介します。

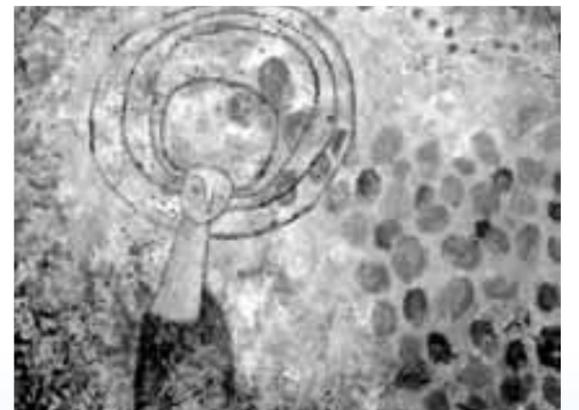


左から奥村さん、世利さん

メッセージ

「二人展は3度目です。私たちの絵は、同じ油絵という手法でありながらまったく違ってきます。ですが、お互いが絵を通じてする話は、植物のこと、星のこと、直感のこと、偶然のこと、神話のこと、と、どこまでも広がっていくのです。

二人の違った人間が展示することで、作品を見る方々が絶妙のテイストを味わっていただけることを、また作家自らの、新たな感性の扉が開かれることを確信しています。」



世利好薇 緑の記憶(455×379mm 油彩)



奥村完奈 MIZUKUSA(273×220mm 油彩)

### 世利好薇さんの個展歴

- 1995年 個展(バラン・バラン/バルセロナ)
- 1997年 個展「バルセロナにて」(福岡)  
1997 世利好薇・奥村完奈 二人展 (GALLERY2104/東京・青山)
- 1999年 個展「植物会話」(ギャラリー源/福岡)
- 2000年 世利好薇・奥村完奈 二人展  
「昼の夢・夜の詩」(鹿児島/笠沙美術館)
- 2002-2004年 グループMOMO 展(ギャラリー風)

### 奥村完奈さんの個展歴

- 1996年 個展(ギャラリー/福岡)
- 1997年 個展(Gギャラリー/福岡)  
1997 世利好薇・奥村完奈 二人展 (GALLERY2104/東京・青山)
- 2000年 世利好薇・奥村完奈 二人展  
「昼の夢・夜の詩」(鹿児島/笠沙美術館)  
グループ展「ミニアート展」(福岡)
- 2001年 三人展(ギャラリー珈琲/福岡)
- 2002年 02 Spring(ウォーターリリー/福岡)

## 8月の企画展

山本徹夫展  
8月6日(土)~28日(日)  
(月曜休館・13日~15日休館・入場無料)